

北 ぶらくろあ

第2号（毎月1日発行）

図書館に行こう！

熊本で群発している大きな地震と災害。東日本大震災や阪神・淡路大震災のときもそうでしたが、無力感を覚えてしまいます。こうしてミニコミ誌を出すことも、古本屋で本を販売することも、なんの助けにもなりはしない。衣・食・住が足りてこそ、活字を楽しむ余裕が出てくる……。

しかし、生きて行くには、楽しみや生きがいも必要です。生活や人生の復興に、本が重要な役割を果たす可能性があることを、碧野圭さんの「書店ガール3」を読んで再認識しました。熊本の被災者の方々に、ゆっくり読書が愉しめる日常が一日も早く戻ることを願って、この原稿を書いています。

わたしは、図書館が大好きです。東京で暮らしていたときは、地元の図書館はもちろんですが、近隣都市のまだ行つたことのない図書館にも、旅行気分で行って行きました。ときには寄り道して街中を散策、お金のからないレクリエーションでした。図書館の

近くに住みたい、そんな願望を抱いていました。もしかしたら図書館のそばで暮らしていれば、古本屋を開くこともなかったでしょう。庄原市にも、「倉田百三文学館」を併設した「田園文化センター」という素晴らしい図書館があります。隣の三次市にも施設や蔵書が充実した「三次中央図書館」があります。今回、紹介するのは本誌のエリア外になりますが、「哲西図書館」、岡山県の新見市哲西町にある図書館です。

いる。大喜びでカードを作った、漫画のシリーズものをどっさり借りたことを覚えています。

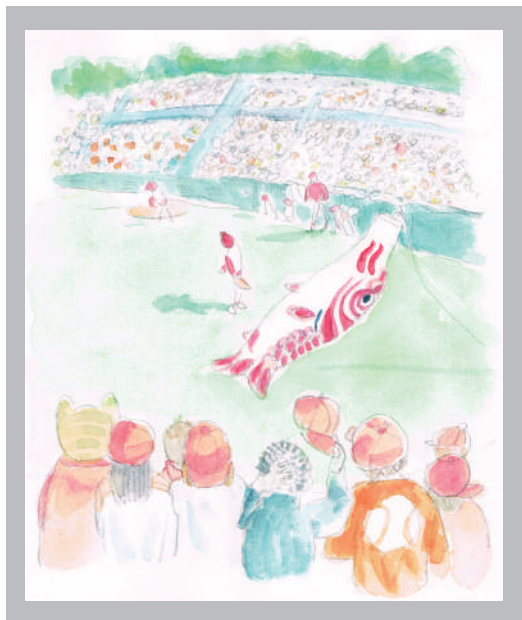
これは、図書館を含む診療所や保健福祉センター、文化ホールを一体化した総合施設「きらめき広場・哲西」をNPO法人が運営しているから実現できたことで、現在では図書館業務が新見市立図書館の傘下に入ったことで、利用者カード発行は市内に在住・在勤・在学している者や、隣接する庄原市、神石高原町、日南町、高梁市、真庭市の在住者に限定されています。

それでも哲西図書館は魅力的な図書館です。年末年始や特別整理期間以外は年中無休であるなど、独自性も維持しています。

先日、久しぶりに哲西図書館を再訪、新しい新見市の図書カードを発行していただきました。他の新見市内の図書館も行ってみたいと思っています。高梁市には、約六万冊の漫画の蔵書がある「吉備川上ふれあい漫画美術館」（入館料・大人四百円）があります。図書館はわたしの生涯の親友です。

（ぶら書房店主・赤川仁洋）

今月のどらさん



この絵をブックカバーにしています。 絵・風太

下村湖人「次郎物語」

“憧れ”の気持ち育てた

私の少年の心に、“憧(あこが)れ”

という気持ちを呼び覚ましたのが、この本です。題名を聞いたことがありませんか。「三四郎」なら知っている？「三四郎」は夏目漱石の小説で、大学生の物語です。「次郎物語」は、戦後間もなく出版され、大変に人気があつて4度も映画になつてゐるのです。

次郎は、赤ん坊のときに里子に出され、小学校にあがる前に父母の元に戻されますが、気の強い母親になじめず、その上、お祖母さんから意地悪をされ、反抗的な子どもと思われようになるんです。昔は格式張った家では、封建的な意識が強く長男が大事にされ、次男以下は使用人扱いにされることがありました。

次郎は、名前から分かるように次男です。「はだしのゲン」のゲンもやんちゃですが、次郎もやんちゃです。それには理由がありました。母親やお祖母さんにはなかなか分かってもらえませんでした。

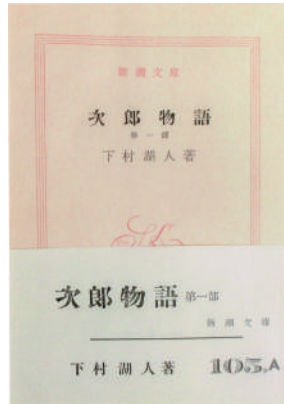
次郎の強い気持ちは、次第に分かってもらえますが、そのときには

母親は重い病気で病床にありまし

た。そんな次郎が、小学6年生当時の私の同情を引きつけました。実は、

世界の古典文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の少年少女たちにも読んでもらいたいと思い、毎月1冊ずつ紹介していきます。

また読んでみたい本② ——少年少女たちへ 音谷 健郎



第2回目は下村湖人の『次郎物語』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧・庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を歴て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

す。でも、悪いことをしていないと思つてゐる次郎はくじけません。中学生の次郎は、つねに何かを求めて成長していきます。上級生になり、

学校でストライキをするかどうかの大議論をします。女学生も現れます。旧制中学というのは、5年制で上級

青年塾で、人生のことや日本のことを考える生活に入っていきます。正直、ここからはよく分かりませんでした。

「次郎物語」は文庫本になつていて、全5部で5冊の長い小説です。中学上級生になる第3部くらいからは中学生になつてから読みました。後で知つたのですが、この小説は少年の成長を見守る教養小説といわれるものでした。あちこちに教訓になる言葉が盛りこまれていて、例えば、尊敬する先生が「およそ何が恥ずかしいと言つても、無慈悲なことをするほど恥ずかしいことはないぞ。無慈悲な人間は、強いように見えて、実は一番弱いものなんだ」とさします。

生は高校生のようになり大人びていきました。だから、次郎たちの議論は、「シルズ」の大学生の議論のように複雑でした。常に理想を求め、責任をとる次郎に対し、私は目を見張つたのでした。あこがれはここからでした。

次郎は中学を追われた後、今度は

旧制中学の校長を経て、この「次郎物語」に二〇年近くをかけ、心血を注いでいたのです。文庫本を引っ張りだしてみたら、1冊の定価は百円でした。

ネットで調べたら、「次郎物語」は、今もいろいろな出版社から出ています。

今月の3冊

どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「熱砂の三人」

ウィルバー・スミス 著 文春文庫

今まで読んだなかで、一番おもしろかった小説は何ですか？ 真っ先に頭に浮かぶ作品が「熱砂の三人」。図書館で何気なく手にした文庫本で、作者の名前も知らなかった。当時は失業中で、分厚い本を好んで借りていた。

時代は1935年、イタリアの独裁者ムッソリーニの領土侵略で孤立したエチオピアに、ひそかに武器弾薬を送り込んで一攫千金を狙う流れ者のアメリカ人と武器商人のイギリス人。それに男勝りの女流ジャーナリストが絡んで、過酷な砂漠の旅を続けていく……。



寝食の時間を惜しんで、一気に読了した記憶がある。血湧き肉躍る本格冒険小説の頂点。映画化されていないのが不思議である。

「つむじ風食堂の夜」

吉田篤弘 著 ちくま文庫

昭和を感じさせる懐かしい町「月舟町」、そこにあるちょっと風変わりな「つむじ風食堂」を舞台にした連作小説。暖簾に名前も書いていない安食堂だが、パリの裏街のビストロを意識した凝ったメニューが並んでいる。人工降雨を研究している「雨降り先生」、古本屋の「デニール口の親方」、不思議な帽子屋・桜田さん等々、登場人物が魅力的で、読んでいると一緒に定食でも食べながら談笑しているような気分になる。



200ページに満たない小品だが、青山ブックセンター六本木店では、すべての本の売上第1位を3年連続で記録したこともあるようだ。都会生活でささくれた心には、癒し効果満点の活字の良薬である。

「海狼伝」

白石一郎 著 文藝春秋

「熱砂の三人」がアフリカの砂漠が舞台ならば、こちらは日本の近海が舞台。対馬の小島で生まれ育った少年が、瀬戸内海を根城とする村上水軍の海賊衆に捕えられ、その配下となり、海の男として成長していく過程が活写されている。

倭寇と呼ばれて朝鮮や中国の沿岸を荒らしまくっていた冷酷非常な海賊団との海戦は、本作のクライマックスであり、日本海洋冒険小説の白眉。1987年の第97回直木賞受賞作だが、昨年も文春文庫で新刊が増刷されている。続編の「海王伝」は、舞台を南支那のジャム（現在のタイ）に移してスケールアップ、読み応え十分だ。



《サンプル広告》

土井漢方薬局(平成27年12月オープン)

あなたにあった漢方薬をお作りします。また、処方箋調剤も受け付けております。足腰の悪い方にはご自宅まで配達もしておりますので、ぜひご利用ください。

東洋医学と西洋医学を専門に学んだ鍼灸師免許をもつ薬剤師が地域の皆様の健康を守り信頼されるかかりつけ薬局として誠実にご相談に応じます。

▶ 営業時間：9時～18時まで

▶ 定休日：日曜／祝日

▶ 電話：0824-55-6461

▶ 場所：三次市南畑敷町38-4

※お車でご来店の方、「カメラのサエダ」「ムラタケ」を目印にお入りください。

(桃源郷……)

一雄は心の中でつぶやいた。山林を背にして、星霜を刻んだ寺院がどっしりと座している。土手や空き地に群生した黄色い菜の花が、春の陽光を浴びて輝いている。桜はもう散り始めて、薄紅色の花弁がゆるやかに舞っている。都心のマンションで生まれ育った一雄には、別世界の光景だった。

山門の前の道を手すりまで辿ると、石段が見えてきた。八重桜の単木が満開だった。ウグイスが鳴いている。簡易に積み上げられた石段を登って行くと、狭い平地を取り囲むように、石塔が並んでいる。ネットで調べた情報では、この石塔墓は全部で三十二基もあるらしい。

一雄は、ジャケットの内ポケットから、折りたたんだ紙片を取り出した。この一枚のメモ書きが、一雄をこの山間の土地まで連れて来た。一雄は先月まで引越し専門の運送会社で働いていた。その会社では、遺品の整理業務も請け負っていた。

このメモを遺した人物は、六畳一間の古びたアパートの一室で、ミイラのように干からびて発見された。八十一歳の老人の孤独死だった。身寄りはなく、縁戚の者は見つかった

が、故人は年金生活者で貯蓄もほとんどなく、遺骨や遺品の引き取り手も見つからなかった。

そのメモは、炬燵の天板の裏側に貼り付けてあった。赤いマジックで、宝と書かれた文字が目に入った。何かの地図らしい。

「死んだ爺さん、大泥棒だったのかもしれないぞ。隠した財宝の地図だっ

仕事を探しているんだ」、「背広や制服を着たサラリーマンなんかにはなりたいくない」、「夢を諦めたくないんだ」、家族にも友人にも、自分にも言い訳を続けてきた。役者になって有名になりたいという漠然とした夢があったが、オーディションで何度か落ちただけであっさり断念した。役者はおれには向いていない……。

メモには「富子」と記してある。ここに来る前に案内を請うたお婆さんの上品な顔を思い浮かべた。偶然だろうが、玄関先の郵便受けに「宮内富子」と書かれていた。片方の足を引きずるようにながら、お寺が一望できる場所まで案内して、丁寧に道順を教えてくださいました。

「宝島」

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子②

※県北の歴史や風物を題材としたファンタジー小説です。

たりして」

古株の先輩が真面目な顔で言った。

「まるで宝島のようなだな。一緒に探しに行くか？」

目が笑っていた。結局、一雄は三カ月後にはそのバイトを辞めて、再び無職になった。三流大学を二年で中退してから、フリーター生活を続けて二十七歳になる。「自分に合った

メモに書かれた「久代宮氏一門の墓所」は、ネットで検索するとあっけなく見つかった。これが離島なんかであれば本当に宝島なのだが、実際の場所は中国山地の山の中にあつた。ローカル線を乗り継いで、この地図の場所までたどり着いた。

正面のいちばん背の高い五重の石塔の右側、三番目が、目的の石塔だ。周囲を見渡して、誰もいないことをあらためて確認した。石塔の背後に回って、三十センチばかり離れた場所を移植ゴテで掘り返した。鏝だらけの茶筒の缶が出てくるのに、さして時間はかからなかった。蓋を開けようと指に力を入れると、腐食した箇所が破れて穴が開いた。油紙に包まれたものが出てきた。

「天野将太郎という名前を覚えていませんか」

老女に笑顔が浮かんだ。

「疎開でお寺に来ていた将太郎さんね。よく覚えているわ」

まじまじと一雄の顔を見た。
「ひょっとして、お孫さん？」

思わず一雄は頷いてしまった。老
女の笑みが全身に広がった。

「そうだったの。将太郎さんの……」
目が潤んでいる。

「それで、将太郎さんは？」
「今年に入って急に具合が悪くなっ
て……」

言葉が濁すしかなかった。詳しい
ことは何も知らないのだ。

「遺品を整理していて、こんなものが
出てきたんです」

漆塗りの赤い櫛と、「宮田富子様」
と書かれた古い封筒を差し出した。

手紙を読んでいる老女の顔が紅潮し
て、少女の顔になった。涙が溢れだ
した。



将太郎老人、いや、将太郎少年は、

この恋文を手渡すことができなかつ
た。この地を再訪することを誓って、

手紙を地中に埋めたのだろうか。一
雄は、あの宝の地図を書いた老人の

気持がわかるような気がした。死を
前にして、自分の想いを、自分の生

きたあかしを、誰かに託したかった
……。

玄関の引き戸が開く音がした。

「おばあちゃん、いるの？」

元気のいい声だった。やがて、ジ
パンにトレーナー姿の女性が姿を現

した。年齢は二十代の半ばだろうか。
一雄は放心したように、化粧っ気

のない勝気な顔に見入っていた。「一目
ぼれでした」、恋文の音が聞こえた
ような気がした。

※久代宮氏一門の墓―奴可郡久代
(現・東城町)を根拠地として発展し
た久代宮氏は、天文二年(一五三三年)
宮氏七代高盛が西城・大富山城に拠
点を移すと、一族の菩提寺として栗村
に曹洞宗三峰山浄久寺を建立した。
石塔の墓石はすべて、帝釈地方産の
結晶質石灰岩(コゴメ石)で出来てい
る。

【庄原市文化財ガイドブック参照】

どらくる俳壇

聖五月バイブルも売る古本屋

近藤 昌平

桜湯に幼心の開きけり

原博己

はじめまして いや再会ツアイファイかな燕どの

赤川冬人

投稿&寄稿

「臨終を迎えた文豪の本音」

近藤 昌平

古本屋で手に入れた嵐山光三郎の
本、『不良中年』は楽しい』の最後
に近いページで僅か数行ですが、意
外にも倉田百三についての記述があ
りました。

亀井勝一郎が臨終近い倉田百三を
病院に見舞ったとき、白髪と白髭の

倉田は、かすれ声で「亀井、浄土は
あるか」と訊いた。倉田は『出家と
その弟子』を書き、宗教的求同心の

強い作家である。その倉田にしても、
死の寸前まで迷っている。とありま
した。

この本と出合うことがなければ知
らないことでした。

北斎も九十年間生きて「あと十
年いやあと五年」と現世に未練をの
こしている。これが人間の本性とい
うものであろう。悟りずっと人間
らしいと書いてありました。

僕も来年は米寿、「あと十年いや
あと五年」現世に未練がのこりそう
です。

本との出会いは、本当に面白いで
すね。

※投句を歓迎します。

《情報&原稿を募集します!!》

- 仲間募集
 - 教室&講座案内
 - イベント情報
 - あなたの大切な本の紹介
 - ボランティア・ライター(現地記者)募集!
- どらくろあで地元の記事を書いてみませんか?

※応募先はどら書房・赤川まで。掲載は無料です。

『庄原メイプルラジオ』

毎週日曜日
13時~放送中!!

庄原で過ごすパーソナリティ達の
何気ない日常の話と地域の情報や
ゲストを招いて放送する地域密着
エンタメ放送!!

YouTube

和家チャンネル:



陶芸教室

どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

自作のお茶碗で
お茶を飲んで
みませんか?

- 金・土・日曜日開催
- 場所: 県立広島大学前簡易郵便局に併設
- 費用: 一回500円+材料費
- 連絡先: 0824(74)0686 洲沢(スザワ)

— 参加者募集 —

MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)

みよし運動公園の屋内&屋外コートで、硬式テニスの例会を行っています。

- ・ 火曜日 (10:00 ~ 12:00)
- ・ 水曜日 (10:00 ~ 12:00)
- ・ 土曜日 (12:00 ~ 14:00)

入会金、会費等は必要なく、コート利用料だけを当日の参加者で分割負担。現在、50人をこえる会員がいて、ご自分のペースでエンジョイされています。例会だけではなく定期的にMTECの大会や他の地域のテニスクラブとの交流会を開催。興味のある方は、一度、例会にご参加ください。見学も歓迎します。

連絡先: 中川 (☎080-5610-2376)

比婆山神話とイザナミの葬地

日本神話のルーツを歩く

講師: 三浦佑之 (立正大学教授)

とき 5月13日(金)18時30分~20時

ところ 庄原市田園文化センター 多目的ホール

入場無料

問い合わせ: 庄原市教育委員会教育部生涯学習課文化財係 (TEL:0824-73-1189)
田園文化センター (TEL:0824-72-1159)

編集後記

◇「どらくろあ」2号をお届けします。創刊号の編集後記で、「骨格ばかりのサンプル誌」と書きましたが、残念ながらまだまだやせっぽちですね。みなさまのご意見&ご要望を吸収しながら、筋肉質の体をつけていければと考えています。

◇「どらくろあ」の「くろあ」について、そんな英語があるのかという指摘がありました。crowという単語があり、英語辞典では「時を告げる」という意味を持っています。プレイヤーと同じような感覚で「くろあー」を「時を告げる人」としたのですが、独断の造語の域を出ていません。「どらくろあ」はすべてわたしの造語と解釈していただけたら幸いです。

発行: どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail: touzin@sannet.ne.jp
年間購読料: 2,000円(郵送費込)

誌面デザイン: ROUTE183
協賛: 九日市愛好会

九日市だより

九日市の歴史①

九日市愛好会 会長 寺岡隆行

現在の九日市（くんちいち）は毎月九日に開催されていますが、昭和年代の世界大戦で中止になるまでは、毎月九日、十九日、二十九日と月三回、開かれていました。

九日市のことをまとめるのに参考にした文献は、芸藩通史、庄原雑録、庄原市史、庄原の歴史通史編、永江の里から庄原町へ、広島県の地名、井上円了選集第十三巻、日本史小年表、全訳古語辞典、などです。これらを調べた結果について、総合的に述べてみます。

九日市の始まりは、天正年間（一五七三〜一五九一年）といえますから、四百年くらい昔です。即ち、室町時代から安土桃山時代に代わった頃、室町幕府滅亡の一五七三年、織田信長が安土城を築き移った一五七六年、本能寺の変で明智光秀が信長を亡らぼした一五八二年、豊臣秀吉が大坂城を築いた一五八三年、徳川家康が江戸城に入り豊臣秀吉が全国を統一した一五九〇年、秀吉が身分制度（士農工商）を定めた一五九一年、この頃が天正年間です。

九日を「はつぐんち」、十九日を「なかのくんち」、二十九日を「おとぐんち」

と言っていたと、慶応二年生まれの私の祖父から聞いた記憶があります。

天正年間に泉州（今の大阪府の南部）から、板倉宗右衛門という浪人が庄原に来て、右近源右衛門の娘の婿になって、尾道から塩や海産物を運んで、農家の米と交換する市（いち）を始めたという説があります。それが、それよりも前に物々交換の市らしいものがあつた様です。

「庄原雑録」によると、税金の話として次のように書かれています。

庄原の町に月三度塩市がありました。もともと、右近家の敷地で近在の者が集まりいろいろな商売を始めました。山内の殿様より誰が何処へ店を出すか割り付けをなされて始まりました。普通の月の市には税金は取りませんでした。十一月二十九日と十二月九日と十二月十九日と十二月二十六日には他所から来る商人より少しづつ取る様に仰せつけ、税金として運上銀（貢租）九匁と小物成銀（雑税）を一緒にとつていましたが、御新格（正徳二年浅野吉長が実地した群制改革の新しい決まり）が出来た時からは税金を取ることを停止したということです。

山内城主の山内元通（やまうちもとみち、十二代、天正五年没）が市を見物す

る為に、板倉家に棧敷（さじき）を設けさせたといえます。以後、板倉家を棧敷屋（さじきや）と呼ぶ様になりました。

その頃の庄原の町の様子は、寛永（一六二四〜一六四四年）になると、街道の要地として庄原に宿駅が置かれ、伝馬（①律令制で駅馬のほかに各郡に常置し、公用に供した馬。②各宿駅に常備されて宿駅から次の宿駅まで人や荷を運ぶ公用の馬。）九頭が設けられていました。

万治元年（一六五八年）になると、庄原の町には、すでに九軒の酒屋があり、大阪屋弥三兵衛は米百三十石、棧敷屋甚兵衛は米百石で酒造りを行っていました。



